

外国人多い自治体が学校

外国人の子どもたちに早く日本に受け込んでもらいたい。外国人が多く住む自治体が、

「プレスクール」や「サブスクール」の形で、日本語の基礎や生活習慣を教える取り組みを進めている。子どもたちが日本の学校や社会に慣れるための「助走期間」を支えようと模索する現場を訪ねた。(深松真司、小川雪)

滋賀・長浜

語学力異なり「試行錯誤」

「どっちの数字が大きいかな?」。指導員が机の上に「6」と「4」のカードを並べ、日本語で尋ねた。

「ろく」。ブラジル人の小学生の女の子が日本語で答え、「6」のカードを手にする。「よくできたね」とほめられ、はにかんだ。

滋賀県長浜市が07年4月、旧市保健センター内に開いた日本語初期指導教室「NAGOMI(和)」。来日したばかりの子どもたちが市内の公立小中学校に在籍しながら、月曜から金曜まで通ってき、日本語の読み書きや算数を学ぶ。

近郊の工場などでは、多くの外国人労働者が働く。人口の5%弱にあたる約4千人の外国人が暮らし、その子どもたち約200人が市内の公立校に通う。

だが、いきなり公立校に入っても、日本語が理解できない上に習慣、文化の違いからなじめない子ども。なごみは、在籍校へスムーズにとけ込めるよう、簡単な日本語や生活習慣を身につける「プレスクール」だ。3月までに、ブラジルやペルーなどから来日した34人が学んだ。最長6カ月、平均3、4カ月で日本語の日常会話やかけ算の九九を覚え、在籍校へ戻っていく。

先生は元小学校長の柴田郁造室長(61)と、ポルトガル語ができる指導員2人。大学生や市民もボラ



複数の星が描かれたカードを使った「数合わせ」などで算数を学ぶ「NAGOMI」の子どもたち=滋賀県長浜市

ンティアとして加わる。「毎日が試行錯誤」と柴田さん。子どもたちは来日時期も学年も日本語能力もばらばら。それぞれのレベルにあわせたカリキュラムを組まなくては行けない。決まった教材はない。ひらがなばかりの幼児用絵本や、折り込みチラシに載っている卵や魚、車の写真。身近なものは何でも日本語学習に生かす。授業の始まりと終わりには起立してあいさつ▽食事

前に手を洗う▽教室はみんなで掃除—といった学校生活の決まり事も教えている。「ここは港で、子どもたちは船出を控えた船長です。荒れた大海へ乗り出せるエネルギーを蓄えさせてあげたい」と柴田さん。卒業生から手紙や写真が届くとうれしいという。

「将来は日本語の先生になりたい」。3月から通い始めたブラジル人のカスヨシ君(10)が笑った。

滋賀・湖南 「片言でも母語」教員ら学ぶ

滋賀県湖南市にも昨年9月、「さくら教室」ができた。市立小中学校に転入するまでの3カ月間、市の国際協会がある建物で、初歩的な日本語や日本の習慣を学ぶ。これまでの2期で、27人が通った。日本の学校の雰囲気になじんでもらおうと、子どもたちは毎日、近所の市立水戸小学校に給食を食べに行く。児童383人(07年度)の同小に、外国出身の児童は54人。市内でもっとも割合が高い。ほとんどが日系ブラジル人とペルー人だ。同小は06年度と07年度、滋賀大学と共催で、3夜にわたって「学校教員のための多文化共生セミナー」を開いた。「トイレはどこですか? オンジ・エ・パニエイロ?」夜の教室にポルトガル語が響く。同校の教師や共催する滋賀大学の学生ら20人が参加した。学校でよく使う言葉を中心に、初歩的な会話を日系ブラジル人の講師に学び、県国際協会のスタッフからは、さまざまな国の家庭の写真を見て「どこに住みたいか」などを話し合い、異なる文化に飛び込む時の気持ちを学んだ。同小では、言葉や習慣の違いからトラブルになることもあるという。松浦龍一・前校長は「片言でも母語で話しかけることで、子どもとのコミュニケーションはぐっと深まる。言葉で多文化共生といっても、実際どう接したらよいかわからない教員は多く、セミナーでコツをつかんでいるようです」。講座を企画したのは、滋賀大学教育学部で国際理解教育コースを担当する杉江淑子教授。「学生の関心は高い。私たちもセミナーで現場の話を聞くことで、教師を養成する大学に何が求められているかをつかむことができる」と話す。

道徳も必要でも余裕なく

大阪市

大阪府は84年度から、「帰国 通ってくる。いわば「サブスクール」形式だ。小学4年、中学校に指定されているのは4小学校、4中学校。校内に設けられた日本語・適応指導教室に、市内の小中学校から日本語学習が必要な子どもたちが週2、3回

「カッコの中にはどんな日本語が入りますか」「先生、むずかしい」「ゆっくりやったらいいよ」3月上旬。センター校の一つ、市立阿倍野中で、フィリピンや韓国から来日した中学生4人に教諭の坪内好子さんが文法を教えていた。ここには計20人が通う。

坪内さんは、美術教師から転じ、センター校での日本語指導が12年になる。「来日当初は教室で泣いてばかりいた子が、1年後には日本語で冗談も言えるようになる」と話す。当初は、中国からの帰国者の孫が中心だったが、最近は親の就労や国際結婚に伴って来日した南米や中国の子どもが増加。中国語、韓国語、朝鮮語、フィリピン語、ポルトガル語、スペイン語と母語も多様だ。「共通語」である日本語を学ぶ子どもたちを見つめながら、坪内さんは課題も指摘する。「日本で暮らすためには日本語や教科学習は大切です。一方で、中学生で学ぶべき道徳や性教育などの勉強も必要。本当は両方を教えてあげたいが、人的にも時間的にも余裕がない」